

地熱×八幡平市

地域資源と地熱発電について考える

地熱シンポジウム in 八幡平 2017 を開催



暮らし人々の生活から
地域資源利用を考える



studio-L 代表
山崎 亮 氏
東北芸術工科大学教授。地域住民課題解決のコミュニティデザインに携わる。

温泉熱利用で調理法や
健康法・農業が変わる

50℃洗い・70℃蒸しを聞いたことがありませんか。テレビ番組でも紹介されてブームになりましたが、50℃洗いや70℃の蒸気で蒸すことで、野菜が元気になり、味も良くなり、腐敗菌が減少して日持ちするようになるなど、さまざまな効果が表れます。

50℃のお湯を焔にまくことでも効果がみられます。トウモロコシでは、根の張りが強くなり、農薬の削減にもつながりました。

50℃洗い・70℃蒸しに、地熱資源をうまく利用することができれば、人々の生活が変わります。

地域づくりとはどのようなことでしょうか。

地域づくりをやりましょと表面的に地域を変えても、いずれ元に戻ってしまう気がします。地域とはそこに住む人の人生の積み重ねであり、人生とは日々の積み重ねです。人の意識が変わると、行動、生活、人生が変わります。そのような人たちがたくさん集まると地域が変わります。

もし地域を変える必要があるとすれば、まずは日々の生活や人生を中心に捉え、自分自身が楽しんで生活できるか、その次に地域資源を見渡して、生かせるかもしれない、という発想で考えることを提案します。



スチーミング調理技術研究会代表
平山 一政 氏
蒸気技術専門家。蒸気などを利用した食品の調理や加工を研究している。

10月15日、地熱シンポジウム in 八幡平 2017 は岩手山焼走り国際交流村で開催されました。

10月8日の「地熱発電の日」記念事業として開催された同シンポジウムには、地熱開発関係者や市民ら約80人が参加。全国各地でまちづくりに関わる山崎亮氏、低温蒸気を使った調理研究に取り組むスチーミング調理技術研究会の平山一政氏が基調講演しました。

パネルディスカッションでは、山崎氏がコーディネーターを務め、平山氏、田村正彦市長、沸騰地熱塾生の古屋亮輔さん、山下直基さん、



パネルディスカッションで意見を交わす参加者

山下諒さんが登壇。平館高校の地熱探検隊によるVTR発表や塾生が、地熱活用による「熱水ハウス」での農産物や加工品作り、地熱関連施設などを巡る2泊3日の学習プログラムなどのアイデアを発表しました。

参加者は同シンポジウムを通じて、これからの地熱資源の活用について理解を深めました。



展示された八幡平地熱蒸気染色の作品



さまざまな質問に応じる地熱開発事業者

平館高校の生徒たちが地熱探検隊として見学



松川地熱発電所を訪れ、職員から説明を聞く平館高校地熱探検隊

8月21日、平館高校普通科進学コースの2、3年生25人は「地熱探検隊」を結成して、地熱施設を巡るツアーに参加しました。

探検隊は、地熱を利用してマッシュルームや馬ふん堆肥を製造しているジオファーム八幡平、松川地熱発電所、地熱蒸気を利用して染色している(株)地熱染色研究所の工房や展示室を見学しました。

生徒からは「市職員が地熱染の服や装飾品を身に付けてPRする」「地熱のマスコットキャラクターを制作」などの提案が寄せられました。

スマートファームプロジェクト 熱水ハウス生産のバジル初出荷

上寄木熱水ハウスを活用し「スマートファームプロジェクト」で育てたバジルの初出荷式は10月24日、市役所で行われました。

初出荷式では、再生可能エネルギーや園芸事業などを手掛けるグリーンリバーホールディングス(福岡市)の長瀬勝義社長、IoT利用のコンサルタント会社MOVIMA S(東京都)のこだまのりひろ社長、田村正彦市長ら関係者が出席。バジルをパック詰めにし、出荷しました。

同プロジェクトは、IoT(さまざまな機器をインターネットでつなぐ技術)と縦型水耕栽培管理システムでハーブや葉物野菜を生産する最新手法の事業です。



岡田副市長(左)に栽培管理システムを説明する長瀬社長(右)